生きることは　旅すること

立教セカンドステージ大学を修了する皆さん、修了おめでとうございます。皆さんの修了を祝うかのように、キャンパスの桜も芽吹き、きれいな花を咲かせています。その中にあって、皆さんはこの諸聖徒礼拝堂の横、チャニング・ムーア・ウィリアムズ主教像の横に咲いている木に気づいたでしょうか。一見すると早咲きの桜の木のように見えますが、実はその木はアーモンドの木です。このアーモンドは聖書にもたびたび引用されています。その中でもっとも有名な箇所は、エレミヤ書第 1 章 11 節から 12 節です。

主の言葉がわたしに臨んだ。「エレミヤよ、何が見えるか。」わたしは答えた。「アーモンドの枝が見えます。」
主はわたしに言われた。「あなたの見るとおりだ。わたしは、わたしの言葉を成し遂げようと見張っている。」

この節の意味するところは、預言者であるエレミヤと主が同じところに目を向けているという共感で、「よくぞ見たものだ」と言っているのです。エレミヤと主の思いが一つになっていることを主は喜んでいるということを説いた節です。
特に、アーモンドはヘブライ語で「シャーカド」と言い、眠らないで目を覚ましていること、見張っていることなどを意味します。アーモンドは 1～2 月頃に他の木に先立って冬の眠りから醒めて芽を出し、花を咲かせます。それゆえ「目覚めの木」とも呼ばれるのですが、これはまさに「よみがえりのいのちの初穂」の象徴なのです。まさに、アーモンドは、永遠に続くようなコロナ禍であっても、必ずや元の生活を取り戻すべく蘇らせてくれる希望の木なのです。そのアーモンドが皆さんの修了を祝うかのようにきれいに咲いているのです。ですから皆さんも希望を信じ、4 月からの新たな人生を送ってください。

確かに 2020 年度はコロナに始まりコロナで終わった 1 年でした。世界中を襲った新型コロナウイルスは、今までの私たちの日常生活・価値観を変えてしまいました。特に今まで当たり前であった、人と会うこと、職場で仕事をすること、教室で授業を行うこと、そして何よりも行きたい所にいつでもどこへでも自由に往来することができない辛さと大切さを改めて実感した年でした。インターネットが発達し、様々な SNS を利用することで身近な人はもちろん、世界中の人と繋がる利便性に注目が集まり、人は一人でも生きていけるという幻想に囚われていましたが、実際に活動が制限されることで、改めて人は一人では生きてはいけない存在であること、すなわち社会的存在であることを思い知らされた 1 年でした。また忍耐と我慢、社会的協調性が問われた年でもありました。

そのような中にあって、今こそ学びを止めないという本学の考えのもと、コロナ禍であっても受講生の皆さんに安心して学んでもらおうと様々な努力をしてきました、その思いに応

えて立教セカンドステージ大学に入学し学び続けた皆さんには、心より感謝申し上げると、その日々の努力には頭が下がる思いです。この半年間、皆さんが学んだ時間は例年に比べると確かに短いものではありましたが、その内容は例年よりも濃密だったと思います。それは立教セカンドステージ大学の教職員が一丸となって皆さんに学ぶことの大切さ、学問の意義を伝えるべく日々努力してきたからです。

ですからどのような形であれ、皆さんが立教セカンドステージ大学で学び、本日修了することに変わりはなく、皆さんは自信をもってこれからの人生を歩んで下さい。確かに、社会はいまだに新型コロナウイルスの終息の目途が立っておらず、かつてのような生活が制限されている中で、多くの不安もあることでしょう。それでもキリスト教主義に基づく教育を建学の精神としている立教大学で学んだ意味は大きいのです。
聖書のローマの信徒への手紙第 5 章 3 節から 4 節には次のように書かれています。

わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。（新共同訳聖書）

この言葉が意味するところは、苦難の先にあるのは、失望ではなく希望なのだということです。今私たちは、新型コロナウイルスの感染拡大にあって忍耐を強いられています。これは誰一人として、そこから逃れることはできません。その際大切なのは、たとえどんな苦難に遭っても少しも揺ぐことなく、希望を信じて歩みつける姿勢です。
今、コロナ禍において私たちに求められるのは、不安に絶望することなく、明日の希望を信じて前に進むことです。
ここで私は皆さんに一つの歌を贈ります。この歌は正に今のコロナ禍を歩む私たちに希望と勇気を与えてくれるものです。

“知らず知らず　歩いて来た
　細く長い　この道
　振り返れば　遥か遠く
　故郷が見える
　でこぼこ道や
　曲がりくねった道
　地図さえない
　それもまた人生

　生きることは　旅すること
　終わりのない　この道
　愛する人　そばに連れて

夢探しながら
雨に降られて
ぬかるんだ道でも
いつかは　また
晴れる日が来るから”

ご存じのように、これは美空ひばりさんの最後のシングルである「川の流れのように」です。この曲は 1989 年 1 月に発売されましたが、その年の 6 月に美空ひばりさんは 52 歳で逝去されました。美空ひばりさんは、死ぬ半年ほど前から立つのもやっとの状態だったそうです。それでも最後の力を振り絞ってこの曲を発表し、謳い続けたといわれています。

「でこぼこ道や　曲がりくねった道　地図さえない　それもまた人生」。まさに現在の新型コロナウイルスの感染拡大は、皆さんにとって「でこぼこ道」であり「曲がりくねった道」でしょう。しかし「それもまた人生」なのです。人生とは決して順風満帆な道だけではありません。時として、乗り越えられないような大きな試練に遭うこともあります。それでも、立教セカンドステージ大学の修了生の皆さんは、その試練を乗り越えてこれからも人生を生きて下さい。

そして、立教セカンドステージ大学での学びこそ、「生きることは　旅すること終わりのない　この道」なのです。ここでの学びこそ、皆さんの生き方そのものだと思います。人生とは一生をかけて学び続けることなのです。
「雨に降られて　ぬかるんだ道でも　いつかは　また晴れる日が来る」。
今の苦しい時代もいずれ笑って話せる日が来ること、そのために皆さんが勇気をもって前進することが、今までの人生を切り開きこれからを生きる皆さんには必要だと思います。なぜなら皆さんが立教セカンドステージ大学で学んだ知識と経験は、これからの社会を生き抜いていくうえで必要な能力であり、それを社会に還元することこそが新たな時代の道しるべであり、立教セカンドステージ大学の修了生に課せられた使命であるからです。皆さんがこの間身につけた知識や経験は、皆さんが意識する、しないにかかわらず皆さんの体に滲みついているはずです。ですから自信と誇りをもってこれからの人生を歩んで下さい。

修了生の皆さん。立教セカンドステージ大学を修了してもこれからも学び続けて下さい。それこそが人生 100 年時代を生きる人たちの手本となるからです。今日のこの日は、たんに皆さんの修了を祝う場ではありません。これからの皆さんの活躍を期待する場でもあります。改めて修了生の皆さん。修了おめでとうございます。栄光は皆さんのものです。

Glory to your future.

（“”は、美空ひばり氏の「川の流れのように」（1989 年）より引用）